

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2016年11月発行～

# ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291  
Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

発行日 平成28年11月10日  
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会  
編集 相坂政夫

## No.50



立冬を過ぎ、吹く風の中にも冬の気配が感じられる今日この頃、会員の皆様如何お過ごしでしょうか。

さて、関西初の「純正律音楽コンサート」を今月11月23日水曜日(祝日)に大阪市旭区民センター・小ホールで開催する運びとなりました。大阪近郊にご親戚やお友達がおられる方は是非告知をお願い申し上げます。

今後、毎年1回は関西で開催してまいりたいと思っております。ご協力のほど重ねてお願い申し上げます。

今年最後のコンサートは12月25日日曜日午後2時から、新宿、牛込箒笥区民ホールで、(株)読売情報開発との共催で「クリスマスコンサート」を開催いたします。是非ご来場ください。

前号でお知らせいたしましたCDリリースの件、いろいろと問題点が発生し・再録音する事となり完成いたしました。今月11月16日に入荷いたします。皆様のご注文をお待ち申し上げます。

来年は3月13日(土曜日)午後2時開演、新宿・角筈区民ホールで開催です。

## ウクライナ2週間のヴァイオリンコンサート審査員

洗足音楽大学教授・ヴァイオリニスト  
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表  
水野佐知香

会員の皆様、すっかりご無沙汰しています。皆様にお詫びをしなくはいけません。6月にリリースするはずでしたCDがかなり遅くなりました。演奏、録音等にもっとクオリティを求めた結果、より良いCDを皆様に聴いていただけたらとの思いでレコーディングをし直しました。本当に遅くなり申し訳ありません。皆様にお待たせした甲斐があり、スタッフ一同良いものができた！と、自負しております。11月16日には入荷いたします。どうぞ楽しみにお聴きください！

さて、10月20日よりウクライナのテレビで開催された「第2回オレグ クリサ国際ヴァイオリンコンクール」の審査員として3年前と同じように招聘され、行ってきました。

今回のレベルは非常に高くびっくりしました。二次予選に残るためには高いテクニックと音楽性が問われましたが、私の15、16才の生徒さんと姉妹の生徒さんを含め日本人4人が二次予選に残りました。本選ではモーツァルテウムに留学中の和久井さんが見事2位、そして4位に芸大4年生の加藤君が入りました。私はクリサ先生はもちろんですが、カラヤン時代のベルリンフィルハーモニーのコンサートマスター、ソリストのEdward ZienkowskiやフィンランドのMeller Päivyt、ウクライナのボス、Wolodymyr Zaranskyなどの先生方から、そして参加していただいた方々からもいろいろなことを学びました。3年ぶりに会う先生方もいましたが、スタッフの方々とも再会を喜び抱き合い深い交流が出来ました。

スタッフの1人ナタリーは、26才くらいですが、日本語を少し話せるのです。彼女は、ジャーナリスト、通訳、アナウンサーなどなど色々な顔をもっていますが、日本語をどうやって学んだのかと聞くと、アニメで、日本のアニメを見て読み書きができるようになったそうです。びっくりですよ！私よりも日本のアニメのキャラクターなど良く知っていました。そして、アニメのキャラクターも自分で描けるようになったそうです。多才ですね。

ウクライナ、ポーランド生まれの先生方は、我々には計り知れない大変な時代を過ごしてきたことが会話の中で聞こえてきました。ウクライナもポーランドだったりロシアだったり領土が時代により違うので、今のウクライナ国籍にはいろいろな国の人がいるようで、同じ言葉でも方言のように少しづつ言い回しが違うそうです。ある先生は今カナダ国籍、いろいろなことの知識を得ようとしてとても真剣、小さい子供達も、コンクールの参加者の演奏に、静かにじっと耳を傾け真剣に身動きもせず聴いている姿が印象的でした。聴きに来る方たちも普通のおじさんおばさん、記者会見も興味深く聞き質問しています。若

い人達も興味を持ち、ウクライナを代表する国際コンクールであることをとても実感致しました。

そして、リビフはとても物価が安く私の生徒さん姉妹とお母様3人で11泊して、朝食付きで6万円しなかったそうです。ウクライナの方に、日本にいらっしゃればとお話ししても、私たちは行くことができないから来てね！と言われてしまうのです。しかし街を歩いていると、とても活気があり、明るく楽しんで生きている様子がとてもびっくりします。先ほどのナタリーも最後のコンサート、記者会見などで司会をされていましたが、ドレス、洋服、髪型等、姿が、本当に素敵なんです。雰囲気もあって！でも、普段も決して高級なものではないけれど、上手く着こなして素敵です。

ウクライナの教授のお家にもディナーにご招待を受けましたが、このお宅がすごい！飾ってあるひとつひとつが大切な思い出の品ばかり、ウクライナの美術品、工芸品等置かれて美術館のようでした。そして余分なものは全く置いていない、お家の中が整然として本当にきれいなのです。奥様のクリスティーナが、全部のお部屋を案内してくれましたが、どの部屋も外には何も置いていないのです。ベッドルームも開放していましたが、何も生活感がないのです。面白かったのは、屋根裏部屋に、玉ねぎ、ニンニク、栗等がきれいに並べて置かれていたことです。きっと寒い冬を迎えるのに食料備蓄もあるのでしょうか。クリスティーナの手料理もすごい！量も種類もいっぱいありました。パイ生地も自分で作り、中に薔薇のジャムの入ったパン。その生地の中に森でとってきたマッシュルームのソテーが入っている一品、ボルシチスープ、色々な種類のサラダ、ホールケーキ、ハム以外はほとんど手作りでした。とても国を愛して勤勉なウクライナの温かい人達と過ごした10日間は、夢のような日々でした。またの再会を楽しみに....

今帰りの飛行機、リビフからウィーンに向かう飛行機の中です。今回はシュポアーコンクールのジュニア部門を受けてる生徒さんがいるので、このコンクールの後、ワイマールに回る都合上ベルリン経由、成田からブリュッセルそしてベルリンへ、ベルリンで一泊してウィーンへ、そしてリビフにとりあえず旅になりました。というわけで、ほぼ1日半かけての到着でした。

雲の上の絨毯とはよく言ったもので、本当に雲の上を歩けそうな気がします。江戸時代キリストが海の上を歩いて日本に来たという話がありますが、雲の上を自由に歩けたり、飛んでいけたりしたら世界中どこでも簡単に行けるのに！と考えます。ドラえもんの「どこでもドア」も同じ？！と、機上からの雲を見ながら、、、！

## ムッシュ黒木の純正律講座 第49時限目

### 平均律普及の思想的背景について(38)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

前回はパスカルが、自身の改悛のきっかけとなった「火の体験」を記した文書を人知れず隠し持っていた、という話をした。この行為は決して独りよがり  
で自己に閉じたものではなく、＜神＞あるいは＜世界＞に通じたものであった  
ことを確認した。

現在の、そして特にキリスト教徒ではない立場からすると、少しわかりづら  
い話かも知れない。芸術の話で考えみよう。例えば、ある画家が生涯で一番の  
傑作をものにしたとして、それを誰に見せることなくどこかに人目につかない  
ところに埋めたとする。作品というのは作り手と人々とのコミュニケーション  
なのだからたとえどんな素晴らしい絵を描いたとしても、コミュニケーション  
を拒絶しているこの態度は芸術家あるいは表現者として相応しくない、と多く  
の人が思うかもしれない。確かに、もったもな意見に見える。しかし、もしそ  
の芸術家が＜神＞あるいはそれに相当するものを信じているのだとすれば、事  
情は異なってくる。その芸術家は人間とのコミュニケーションはしていないに  
せよ、＜神＞あるいは＜世界＞とのコミュニケーションを決して放棄はしてい  
ないのだ。そして何より、＜神＞あるいは＜世界＞と人間とどちらが重要かと  
言えば、信じている人間にとっては当然＜神＞あるいは＜世界＞の方なのだから、  
人間ごときに何を言われようと傑作をものにした以上大したことはない、  
と極言すればそういうことになる。

もちろん、＜神＞がいるかないか、という議論ではない。あくまでも＜神＞  
の存在を前提にして芸術活動を行う人々は、このような価値観の下で創作を行  
っているという話なのだ。

しかし、このような議論は＜神＞という文化を共有していない人には関係の  
ないものだろうか？ 例えば、ある曲の価値はどうやって決まっているのか、  
という問題を考えてみたい。聞き手である人間とのコミュニケーションが重要  
ということであれば、より多くの人に支持された楽曲に価値があるという立場  
が当然考えられる。このような価値判断は決して間違ったものではない。しか  
し絶対無二のものかという、決してそんなことはない。もし支持された人数  
が作品の価値の全てを決めるということになれば、いわゆる芸術音楽はアイドル  
の歌には決して敵わない、ということになってしまう。もちろん、アイドル  
は芸能界が金をかけて宣伝しているから売れるのだ、という主張する人もいる  
だろう。しかし、商業の世界は売れることが第一の目的なのだから、もし芸術  
音楽がアイドルより売れる可能性があるなら、芸術音楽の宣伝により力を入れ  
るだろう。残念なことに、決してそのような事態は起こっていない。

アイドルの購買者である一般人は芸術の真の価値をわからないのだ、そして  
そのような大衆に大切な芸術の価値判断を委ねるべきではない、とそのように

考える芸術家は決して少なくないだろう。しかし人々の支持が芸術の価値を決めないとするならば、何が決めるのだろうか？

すべての価値判断を市場に委ねる、つまり売れたがものが正しいのだ、という考えは、昨今では市場原理主義とも言われ、新自由主義的な改革運動とともに世に吹き荒れたことは記憶に新しいだろう。芸術や学術の世界の人間に忌み嫌われる思想である。だが、もちろん、新自由主義に反対の声を上げるのと同時に、作品にとっての価値は何によって決まるのか、という問題についても改めて考えてみる必要がある。

CD レビュー 純正茶寮  
Les Trois Ours  
純正律音楽研究会理事 黒木朋興

Les Trois Ours  
ハーディ・ガーディ : Ingrid Blasco  
音響 : Guillaume Tahon  
レーベル : Fur ha Foll / Le Logelloù



以前に紹介したブルターニュのバンドネオン奏者のフィリップ・オリヴィエがジャケットの写真で参加している。Amazon では販売していないようであるが、購入したいという方は直接このサイトから手に入れることができる：

<http://www.logellou.com/category/label/> かつて紹介したフィリップのCDもこのサイトで購入できるようだ。

ハーディ・ガーディという日本ではまだなじみの薄い楽器のアルバムであるというだけでなく、サウンド・エンジニアがアーティストとして参加しているという面においても特徴的な作品だと言える。

ハーディ・ガーディはもともと身分の低い楽器であった。ヴァイオリンと同じ擦弦楽器だが、ギターやヴィオラ・ダ・ガンバのようにフレットが付いており、さらにそれを鍵盤で操作して演奏をする。弦を擦るのも弓はなく、回転盤をハンドルで回して音を出す。つまり、機械仕掛けの弦楽器と言える。

機械仕掛けと言っても弦の数も少なく、ピアノのような複雑さはないので、当然、調は固定される。というわけで、平均律ではなく、微分音程を使ったスケールやドローンを基調としたキッチリはもった和音も聞くこともできる。

実際ハーディ・ガーディ奏者の方に聞くと、機械仕掛けなだけに微妙な調整が難しいという。それだけに現在の技術で製造されることによって、より安定した演奏が可能となったとも言えるだろう。その楽器が最新の音響技術とコラボが、ヨーロッパの辺境地域の一つであるブルターニュで行なわれている、ということに芸術のたくましさを感じる。

## 連続 6 回 ドラマ音楽の現場 第二回 付随音楽のむかし

玉木宏樹遺作

クラシック音楽のジャンルを見れば必ず出てくる付随音楽と言うのが、いわゆる劇伴である。

どうも「付随」という訳が何となく気持ち悪く、このての音楽の地位を落としめている原因かも知れない。

劇に付けた音楽は一般的に非常にわかりやすく劇的で効果的だし、そうでなければなんの役にも立たないものだ。

メンデルスゾーンの「真夏の夜の夢」、ビゼーの「アルルの女」、グリーグの「ペールギュント」等、人気のある曲はみんな付随音楽である。

テープレコーダーのなかった昔は、お芝居のバック音楽もオーケストラによる生演奏だった。映画が発明されてトーキーになるまでの無声映画時代の大作は、やはり大オーケストラによる大作曲家の作品が流れた。やがてトーキーとなって、映画音楽という劇伴のジャンルが定着し、TVドラマへと変化していくが、基本的に劇伴であるということにはなんの変化もない。

時代の変化は恐ろしい。たかだか 100 年前にすら、映画、TV、カラオケ、ファミコンなどの娯楽は存在しなかった。

当時の人々の楽しみは、いったいなんだったんだろう。

別にそんなこと心配しなくても、当時の人たちはそれなりにゆったりと自然になれ親しんでいたことだろうし、いろんな工夫を凝らしていたのだろうけど、あえて現在の尺度で言う娯楽はといえば、小説、オペラ、お芝居、見せ物、ということになるだろうか。

読書時間の充分あった昔の小説は、今から見ればダラダラしていても充分通用したらしい。ドストエフスキーが新聞小説を書いていたというのだから驚きものだ。

音楽ではオペラという超大掛かりなだしものを一方にして、お芝居のバックにつけた付随音楽と言うものは、昔の作曲家にとっても馬鹿にできない収入源の一つであったはずだ。

あのベートーベンですらせつせと劇伴を書いているのに、どうも日本のクラシック音楽の歴史観はとりつくろい過ぎていて、スマートすぎはしないだろうか。バッハ、ベートーベン、ブラームスと言う3大Bと呼ばれる人たちなど、もう「聖人」の域である。しかし例えばベートーベンにしても、非常にアクの強い変人で、金には極端にうるさかったというはなしだ。

彼のデビューは非常にセンセーショナルで「悲愴」ソナタの冒頭は、今で言えばヘビメタ級の衝撃度だったらしい。

パリのピアノ教師たちが生徒にベートーベンの曲をひくのを禁じたという話もある。

派手で粗野にうつつたベートーベンの演奏が、先生たちの気にくわなかったと言われているが、もっと切実に経済的な側面があったのだ。というのも当時のピアノの弦はまだ性能が悪く、強く叩くとしょっちゅう切れたらしい。ベートーベンはまさにピアノの破壊者であったというわけだ（逆にいえばピアノを頑丈に進化させた貢献者ともいえる）。

ベートーベンをはじめ、当時の音楽家の収入というのは、演奏によるものがほとんどだったから、かのヘビメタ青年も、耳が聞こえなくなるとはマッサオになったにちがいない。彼はやがてその苦境を乗り越え、作曲だけで生活しようとしたのだから、金にうるさくなるのも当然ではある。

時代はうつり、ロマン派時代にもなると、芝居につける音楽も大変美しいものがはやった。

「真夏の夜の夢」「アルルの女」「ペールギュント」、みんな美しい名曲ばかりだが、原曲はフルオーケストラ用のものではない。みんな当時のシアターオケの編成に合わせている。

「アルルの女」の原曲は26人編成で、ビゼー自らが、足踏みオルガンを弾いたという記録が残っている。

さて、付随音楽は芝居につけているのだから、やっている劇の題名そのものが音楽の題名にもなっている。これほどわかりやすいものはない。

まず、付随音楽といえは、劇の進行と不即不離の関係にあり、時には芝居を説明する音楽であったりする。

人が死んだときには悲愴感を盛り上げるし、美しい乙女の登場には、いいメロディが爽やかに現われる。だから題名のついた音楽は、みんな何かしら、その題名と関係づけて聴く人が多い。

特に日本人の音楽の聴き方は情緒的に片寄る部分があるから、どうしても題名のついた曲に人気がかたむいてしまう。しかしこれだけは用心して欲しい。バレエとか付随音楽とか、はっきりした標題音楽（「禿山の一夜」とか「シェヘラ

ザーデ)を除いた「題名」にはあまり根拠がないということ。  
身もふたもない言い方になるが、「運命」はベートーベンがつけた題名ではない。  
「未完成」も「悲愴」も作曲家とはなんの関係もない。  
シューベルトの室内楽「死と乙女」なんて、いかにもなにかありそうな雰囲気だが、別に何があるわけでもない。自分が過去に書いた「死と乙女」という歌曲に愛着をもっていたシューベルトが、そのテーマを弦楽四重奏に流用しただけで、「鱒」も全く同じケースである。  
現代でもそれは全く同じで、特にジャズ関係の曲名はほとんど曲の内容とは無関係である。  
作曲家の舞台裏を良く知っている私は彼らが曲名をつけるのにどれだけ四苦八苦しているかよく知っている。  
曲は簡単に出来上がるのだが、曲名は一向におもいつかないのだ。  
さる有名なジャズピアニストは、百科辞典と「現代用語の基礎知識」が曲名の源泉だし、ある釣り好きの人は、曲名に魚の名前ばかり付けている。  
まことしやかな曲名ほどウソっぽいので、くれぐれもご用心のほどを…。  
(続く)

## タンゴ小史

純正律音楽研究会 正会員  
弁護士 齋藤昌男

### 1. 序

今から50年以上前のことである。茗荷谷の図書館に潜って勉強していたときに、ある日、高山某というタンゴ評論家が来て、タンゴのレコード・コンサートを開催した。その時の高山氏の説明に、いたく納得した事がある。高山氏の説明によれば、タンゴの90パーセントは西洋音楽であり、10パーセントが土着の音楽であり、それが融合したのがタンゴであると言う。

### 2. タンゴの夜明け

タンゴは1870年から80年頃の間、ブエノス・アイレスにやってきたヨーロッパ移民たちの間に生まれた。ブエノス・アイレスの場末には、移民たちのみすばらしい共同住宅が立ち並び、船員や港湾労働者が集まる場所で、彼らを相手にする女性達も自然に集ってきた。

タンゴの祖先のひとつは、ヨーロッパ起源のカントリー・ダンスで、それがキューバに伝えられ、ここでハバネラに変わり、これが船乗りたちによってアルゼンチンにもたらされた。そこへヨーロッパ伝来のワルツやポルカ、それにアフリカ起源のカンドンベ、あるいはパンパに起ったミロンガなどが歌い踊られ、これらがミックスしてタンゴになったとされる。

### 3. ミロンガ

その土着の音楽の一つが、まずミロンガである。ミロンガとは、アルゼンチ



ン、ウルグアイの民謡や舞曲で、19世紀後半からアルゼンチンのブエノス・アイレスやウルグアイのモンテビデオ（ブエノス・アイレスから見るとモンテビデオはラ・プラタ川を挟んで対岸の200キロ下流に位置する）で盛んになったもので、キューバ起源のハバネラがもとであると言われている。ガウチョ（牧童）たちの抒情的歌謡として歌われる一方、都会の下町で歌われる種々の楽器の合奏による舞曲として発達し、タンゴの前身となったものである。固有のアクセントをもつ2拍子系のリズムと単純な旋律が特色である。

#### 4. カンドンベ

カンドンベとは太鼓を基にしたウルグアイの音楽様式である。カンドンベはモンテビデオのアフリカ系住民によって開始され、バントゥー・アフリカ系のドラムを基に、ヨーロッパ人の歌と、タンゴの息遣いの影響からなっている。2009年、「カンドンベとその社会・文化的空間」がユネスコ無形文化遺産に登録された。

カンドンベの起源は南アメリカでの黒人奴隷の時代からの、コンゴ王の行進の儀式だった。カンドンベはアフリカに起源を持つキューバのソン、トゥンバ、ブラジルのマラカトゥ、コンガダスといった米州生まれの他の音楽と関連がある。様式は19世紀初頭に進化し、特にエリート達によって脅威だとみなされ、1808年にはエリート達はカンドンベの音楽とダンスの禁止を求めた。（Wikipedia より引用）

#### 5. ハバネラ

ハバネラ[habanera]とは、19世紀初めにキューバのハバナ島で生まれた舞曲をいう。

ハイチ革命における避難民によってハイチからキューバにもたらされた。フランスのコントルダンスに源流がある特徴的な4分の2拍子の民俗舞曲は、ゆったりとしたタンゴに似たリズムを持っている。

19世紀後半にはヨーロッパで流行し、ビゼーの「カルメン」の中でカルメンが歌う有名なアリア「ハバネラ」で有名になった。

そして、ハバネラはフラメンコと混ざり合いアルゼンチンに上陸して、タンゴのルーツとなったといわれている。（website「音楽のおはなし」より引用）

#### 6. ポルカ

ポルカ（英語・チェコ語など polka）は、1830年頃おこったチェコの民族舞曲である。速い2拍子のリズムに特徴がある。チェコのほか、タトラ山脈近辺のスロヴァキア、ポーランドなどの山岳地帯にも広がりを見せている。世界的な流行として、1950年代後半には、ドイツのウィル・グラエらの演奏により、「ビア樽ポルカ」(Beer Barrel Polka) や「リヒテンシュタインポルカ」(Liechtensteiner Polka) などがヒットパレードとして世界的な流行となり、南ドイツや世界各地で行われるビール祭り「オクトーバーフェスト」にも好んで演奏されている。（Wikipedia より引用）

#### 7. フォルクローレ

フォルクローレとは、ラテンアメリカの民族音楽の総称で、狭い意味ではアンデスの民族音楽を指す。その代表的な曲が「コンドルは飛んでゆく」や「花祭り」（ウマウアカの男）があります。アルゼンチンでは、パンパ（草原地帯）

の音楽を指し、主流は gaucho（牧童）の音楽である。タンゴの民族性に根ざした音楽であるが、便宜上タンゴはfolkloreではないことになっている。タンゴは、ブエノス・アイレスという大都会で生まれ発展した音楽だからである。

#### 8. コンチネンタル・タンゴ

広辞苑を引くと、コンチネンタル・タンゴとは、ヨーロッパ大陸で生まれたタンゴ。アルゼンチン・タンゴより旋律や和音を重視したものが多い、と出て来る。しかし、コンチネンタル・タンゴと呼ばれるが、実はこの呼称は日本独特のものとの解説もある。いずれにしても1910年前後から、ヨーロッパで活躍するタンゴの演奏家や踊り手が出て来た。特に1925年のフランシスコ・カナロのパリ公演の成功後、各国でオリジナルのタンゴが作られる様になった。有名な作品としては、「ジェラシー」（デンマークのヤコブ・ガーデン作）と「碧空」（ドイツのヨゼフ・リスタナー作）が双璧であろう。

#### 9. バンドネオン

アルゼンチン・タンゴになくてならない楽器は、バンドネオンである。しかし、面白い事に、この楽器はアルゼンチンで生まれたものではない。この楽器は、1840年代にドイツのハインリッヒ・バンドと言う人がアコーディオンの一種であるコンセルティーナを改良したものである。ドイツでは、バンドネオンは、教会の神父さんが、説教で巡回するときの携帯用オルガンとして使われていたと言う。

ところが船乗りや移民達が、この楽器をアルゼンチンに持込んだらしい。初期のタンゴは、フルートやクラリネットも使われていたが、バンドネオンは、だんだんと主軸の楽器になって行った。どこか憂いをたたえる音色、鋭いリズムの刻みがタンゴを演奏するうえで、ふさわしい楽器となっていく。しかし、発祥はドイツでも、現在アルゼンチンでつくられている事もない。今もプロのバンドネオン奏者たちは、みんな戦前のドイツで製造されたものを探し求めているそうである。

株式会社旬報社発行の「小松亮太とタンゴへ行こう」の14ページには、次の様な話が書かれている。

ドイツでバンドネオンのコレクターの男性に聞いたところコレクターの男性が「じつは終戦後にソ連軍が来て、ドイツ国内をどんどん武装解除させていくなかで、バンドネオンの工場にも視察に来た。そうしたら『ここは本当に楽器工房か？それはカムフラージュで本当は武器工場じゃないのか？』という話になって、工場の資料とか道具とか、全部持って行ってしまった。それ以来、よい楽器がつかれなくなった」と教えてくれました。

呆気ないようですが、じつに納得のいくエピソードでした。

これも聞いた話であるが、バンドネオンはドイツで生まれた楽器であるので、ヒットラーはドイツ生まれのドイツの楽器として世界に広めようとしたと言うのだ。これを嫌ったアメリカが、戦後バンドネオン工場を、徹底的に破壊したと言う。

アコーディオンもバンドネオンも基本的には携帯版オルガンである。但し、バンドネオンは、アコーディオンのように、規則的に鍵盤が並んでいる訳では

ない。バンドネオンには、30個ばかりのボタンが配置されており、このボタンは右と左の両方に同じ数配置され、蛇腹を押したときと引いたときで違う音が出る様になっている。従って、左右の押し引きで4種類のボタンの配置を覚えなくてはならない。バンドネオン奏者に直接聞いた話であるが、入門者はかなりいるものの、最後まで続く者は極めて少ないそうである。この為、バンドネオン奏者は大変少ないそうである。

#### 10. アストル・ピアソラ

タンゴを語るときピアソラについて語らざるを得ない。バンドネオン奏者で作曲家のアストル・パンタレオン・ピアソラは1921年アルゼンチン共和国ブエノスアイレス州マル・テル・プラタ市生まれで、両親はともにイタリア移民の二世である。マル・テル・プラタ市は、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスから約400キロ南の大西洋岸に位置するアルゼンチン屈指の避暑地で、海水浴場やカジノで賑わいを見せた場所である。

アストルの祖父母たちがイタリアから移住してきた19世紀の後半は、イタリアやスペインからアルゼンチンの主に都市部へ、大量の移民が押し寄せた時期でもあった。アルゼンチンは、金銀などの資源に恵まれていた訳でもなく砂糖の栽培に適した土地でもなかったため、過酷な労働力を黒人奴隷に頼る必要性はあまりなかった。その上、パンパと呼ばれる大平原の占める割合の多い土地はスペイン人が渡来する以前から、もともとインディオの数が少なかった。インディオ文明は主に山間部を中心に発展していたからである。

アストル・ピアソラは、4才のときにニューヨークに移住し、15才までニューヨークで過ごした。アルゼンチンに帰ってきてから父親の開いたレストランでバンドネオン、ハーモニカを演奏していた。

1954年、タンゴに限界を感じたピアソラは、クラシックの作曲家を目指してパリへ向かった。逆に、パリで、タンゴこそがピアソラの音楽の原点であることに目覚め、1955年7月に帰国後、エレキギターを取り入れたブエノスアイレス八重奏団を結成した。「タンゴの破壊者」と罵られるほどであったが、楽団としては成功せず、1958年に、新天地を求めて家族で古巣のニューヨークへ移住した。1960年帰国し、バンドネオン、ヴァイオリン、ピアノ、コントラバス、エレキギターからなる五重奏団を結成し、以後ピアソラの標準的なグループ構成となった。

さて、ピアソラの育ったニューヨークは、言うまでもなく一番ホットだったのはジャズである。南部のニューオーリンズで黒人達によって生み出されたジャズは、ミシシッピ川を北上してシカゴへ行き、やがてニューヨークへ着いた。大部、洗練されたものの、ジャズは「シンコペーション」という拍子に関するテクニックがある。筆者は、高校時代、**negro spiritual** を主として歌う男性合唱団に所属していた事がある。**negro spiritual** は、真にシンコペーションの連続と言って良い。ピアソラのタンゴには、このシンコペーションが入っている。その他ピアソラの曲の中には、現代音楽の影響を受けて、不協和音、変調、ノイズと言ったものも出て来る。しかし、ピアソラのタンゴのすばらしさは、**Wikipedia** を引用すると次の通りである。

「ピアソラの音楽の最大のすばらしさとは、その中に『魂』を感じる事が

できる点にあるのだ。『魂』とは、英語では『ソウル』、アルゼンチンの母国語であるスペイン語では『コラソン』と言う。ピアソラの音楽にはこのコラソンがこもっているからすばらしいのである。」

## 11. アルゼンチンの簡単な歴史

最後にアルゼンチンの歴史を簡単に見てみたい。

アルゼンチンの最初の住民は、紀元前11,000年にベーリング海峡を渡ってアジアからやって来た蒙古族で、彼らは現在パタゴニアに残る「手の洞窟」を描いた人々で、アメリカインディアンと同族で、スペイン語では **indio** と呼んでいる。

16世紀に入ると、1516年にスペインの探検家、ファン・ディアス・デ・ソリスが最初のヨーロッパ人として、この地を訪れたが、まもなく殺害された。その後もスペインによるこの地の植民化は進められた。1613年には、内陸のコルドバにコルドバ大学が建設された。

1861年、ブエノスアイレス国がウルキーサ（アルゼンチン連合を設立した者）を破り、アルゼンチン連合を併合して国家統一が達成された。そして1862年アルゼンチン共和国となった。勝利した元ブエノスアイレス国知事ミトレら自由主義者が完全な主導権を握ることになり、国家の西欧化のためヨーロッパからの移民が大量に導入されることになった。ただ注意すべき事は、ブラジルは、大量のコーヒーの生産のため奴隷を必要とし、アフリカから大量の奴隷を買って来たが、アルゼンチンには奴隷制度はなかった。

またアルゼンチンの名前は、**argentum**、即ち「銀」から来ており、銀の国を意味する。ラプラタ川流域が銀の産地であるとの誤解に基づいて、国の名前とした。

1880年に正式にブエノスアイレスが国家の首都となった。この頃からタンゴが出てきた様である。

第一次世界大戦においては、アルゼンチンは戦勝国であったから、国は、大部、潤った様である。そして1929年には世界第5位の富裕国となった。しかし、1929年の世界恐慌は、アルゼンチンのモノカルチャ経済を襲った。その後「忌まわしき10年間」と形容された体制が続き、第二次大戦後の1946年にファン・ペロン大佐（妻は有名な歌手エビータ）が大統領に就任した。その後、彼は3回も大統領を務めた。そして1982年のフォークランド戦争とその敗北。その後1988年から1989年の間に5000パーセントというハイパーインフレーション。1999年に起きたブラジルのレアルの切り下げでペソが相対的に高くなり、輸出競争力を喪失、国際収支が悪化した。

この様にかつてはラテンアメリカで比類なき中流国だったアルゼンチンは、もはやブラジル、チリに先を越されてしまったと言えるだろう。

かつて筆者は、鉄道が、廃止され、レールがはがされてゆく話を直接聞いた事があるが、**Wikipedia** には、次の様に記述があるので、引用しておきたい。

「アルゼンチンの鉄道網は総延長31,902kmである。ブエノスアイレスの地下鉄（Subte、サブテ）はスペイン語圏、ラテンアメリカ、南半球全域の

中で最も早く建設された。数十年に亘る整備不足とサービスの腐敗により、多くの路線は1992年の鉄道民営化に伴って閉鎖され、今も数千キロに亘る路線が修理されていない。鉄道輸送は幾つか都市で現役に戻されている。2015年に鉄道が再び国有化され、アルゼンチン国鉄が設立された。」

アルゼンチンの歴史を簡単な年表にしてみよう。

- 1516年 スペイン人 **Juan Díaz de Solis** ラプラタ川探検後、スペインの征服と植民統治が徐々に進む
- 1776年 ラプラタ副王領としてペルフ副王領から分離
- 1816年 リオ・デ・ラプラタ連合州として独立
- 1862年 アルゼンチン共和国となる
- 1874年 当時、軍隊で「エル・ケコ」が歌われたと言う
- 1880年 タンゴの最初の楽譜「パルトーロ」が出版されたとの説
- 1887年 ブエノスアイレスに電車が走る
- 1898年 ファン・マグリオ、街のカフェ「ラ・パロマ」などでバンドネオンを演奏
- 1906年 フランシスコ・カナロー家、ブエノスアイレスへ移住
- 1914年 第一次世界大戦勃発
- 1916年 アトス・ロドリゲス「ラ・クンパルシータ」の形を作る
- 1925年 フランシスコ・カナロのパリ公演成功
- 1945年 第二次世界大戦終了
- 1946年 ペロン大統領に就任
- 1992年 アストル・ピアソラ没
- 1999年 ブラジルのレアルの切り下げ
- 2001年 債務不履行問題
- 2014年 債務不履行問題

以上

(2016年10月26日脱稿)

**玉木宏樹遺作 小説【春の声】**  
**連続四回 第二回**

「先生、お宅、遠いんですか」

圭ちゃんの口調には、やや必至の思いがこめられているようだった。

「そうだな、タクシーで二十分くらいかな」

「それじゃ、ぼくがお送りしますから、もう少しいかがですか」

男はしばらくためらったのち言った。

「じゃ、水割りじゃなく、ビールにしてください」

中年紳士が去ると、店の中は三人になった。

女が気をきかせてかけたレコードは、ただの演歌スナックを、たちまちのうちに小粋なアンティーク・パブに変貌させた。

ウィーンフィルの＜春の声＞に乗って、圭ちゃんの思い出話が続く。

「さっきもお話したように、ぼくは神戸の生まれで、神戸の育ちなんです。うちは、ひどい貧乏でしてね。それでもヴァイオリンを習えたのは、ひとり息子だったからなんです。ぼくの父が、ものすごいクラシック気遣いでしてね」男は腰を落ちつける覚悟をしたらしく、柔らかい表情でうなずいていった。

「フシギだねえ。ぼくも、神戸生まれで神戸育ち」

「おや、先生もですか。これはフシギ、フシギ」

「そして、ぼくも一人っ子で、貧乏人の息子、それに親父もまた、クラシック気遣い」

「へえっ-----。それはまた-----。そういえば、あの時代はそういう人が大勢いたようですね」

「そのようだね。で、話のつづき」

「ぼくは、小学校六年生のときにヴァイオリンを習いはじめまして、中学の二年から三年にかけて、国鉄芦屋駅のすぐそばの先生のところへ、ヴァイオリンを習いに行っていました」

「えっ！ 芦屋の先生だって」

「おや、ひょっとして先生も、あの芦屋の-----」

男は一瞬、眉を陰しくしたが、すぐになごんだ表情に戻った。

「うん、芦屋に通っていたのは事実だ。話を続けて」

「その先生について三月くらいたったとき、両親とぼくは、その先生が指揮をなさっていた、芦屋市民オーケストラの演奏会に招待されたんです。

オケは、それまでにも二三度見たことはあったけど、あまり面白いとは思いませんでした。しかしそのときだけは、知り合ったばかりの他の生徒たちが出演するのとか、先生が棒を振るのとかで、オーケストラというものを身近に感じ、実に興味津々、胸ワクワクでした。曲目は、プロコフィエフの」

「＜ピーターと狼＞か」

「そうです。よくわかりますね」

「いや、ぼくも、そのオーケストラで＜ピーターと狼＞を聴いて」

「そのオーケストラに入られた？ いやあ、フシギですねえ、じゃ、二人とも同じ先生についた兄弟弟子なんですか」

「いやはや、実に全く、信じられないことがあるもんだ。きみは中学の二三年生の時といたね。ぼくの方は、小学校六年生のころだった」

圭ちゃんは一瞬、なにかにつまづいたような妙な顔をしたが、すぐに平静さをとりもどし話を続けた。

「ぼくはもう、＜ピーターと狼＞ですっかりオーケストラに夢中になりましてね。名も知らぬ楽器のかもしれないですフンイキに圧倒されて、終わってもしばらくは、ボーッとしていたくらいですから、先生から肩を叩かれて、＜どうだい、君もやってみないかい＞といわれたときには、それはもう、大声で答えようとしたんですが、声がひっくり返っちゃって」

「フーン-----」

男は腕をくみ、少し考えこむような顔つきをしながら、貧乏ゆすりをはじめた。「で、毎週日曜日に、芦屋市民オーケストラに通うことになりました。水曜日には先生のうちの自宅レッスンがありましたから、ぼくのような貧乏人の息子が、週に二回も、全く生活水準の違う芦屋へ出入りすることになったわけです。

長年、芦屋に住み慣れた先生一家のかもしだす穏やかで上品な上流家庭の風景は、ぼくには全く無縁の世界で、レッスンの順番をまっている間に応接間で眼にする、年輪を感じさせる家具調度や、分厚い外国語の百科辞典、音楽辞典などにただただ圧倒され、それらのものたちに囲まれながらクラシック音楽を演奏するという事の厳かさに、身のひきしまる思いをしたものです。それから先生の二人のお嬢さんたち、もう眼がまぶしくて正視できないくらい上品で爽やかで知的で……。ピアノに向かってさっそうとリストなんかを演奏される姿には、まるで、映画の一シーンを見ているというような気分におそわれたものです」

「じゃ、君もあのお嬢さんたちの演奏を知ってるんだね」

「一度だけ市民オーケストラで伴奏をしたことがありましたから」

「それにしても当時の芦屋は、金持ちにふさわしい上品な町だったねえ」

「ええ、電車の窓からの景色を見ている、芦屋のかもしだすフンイキの違いはすぐにわかりました。その電車、つまり東海道線ですが、芦屋を過ぎて神戸へ向かうとまもなく、全国でも珍しい、川の下をくぐるトンネルがあります」

「芦屋川だ」

「そうです。その出口の崖のすぐ山側に、仏教会館という廢墟のような建物がありまして、今は名前も変わって立派になったそうですが、当時はさびれ切つて、滅多に使われることのない、それでも十分に厳かな感じを充満させた、小さな会館でした」

「きみも、あそこでやったのか。フシギだなあ、ぼくもそうだった……。しかし、おかしいなあ。あれは、山側じゃなく、たしか浜側だったよ」

圭ちゃんは、一瞬ひるんだ。

「そうでしたっけ……。ま、とにかく、練習が始まったんです。毎週日曜日の、夜六時から八時でした」

男は無意識のうちにか、時計に眼をやっている。

「よろこびいさんで入ったのはよかったのですが、いざ練習が始まってみると、それはひどい、地獄のような苦しみでした。

いまにして考えると、とてもオーケストラとはいえないようなへたくソ集団で、棒を振ってる先生も、明確な指針をもっているとは思えないような、とにかくもう一度、もう一度というばかりの、まるで時間をもてあましていくような反復練習の連続……。

いまでこそ音楽に反復練習の必要なことはよくわかりますが、当時の、まったく子供だったぼくにはねえ……」

男は無反応のまま、下を向いている。

「ぼくは、他の人を下手クソだと言えらるほどうまくなかったけど、指だけは当時、やたらと早くまわりましてね。難しいところを、なんとなくごまかすの

が得意でして、三十がらみのサラリーマンたちのなかに混じった最年少のぼくが、そのオーケストラのなかでは、いちはやく重要な役割を与えられました。それにもかかわらず、無意味な反復練習のたびに反抗して、〈あーしんど〉とかくねむたい、ねむたい〉などと言っては、みんなの邪魔をしたんですが、たかが子供がアクビをして騒いでも怒るような人もいず、逆に、腕白小僧として、みんなに可愛がられたもんです」

男はあらぬ方向をむいて、アゴをなではじめた。

「そのころ、ヴァイオリンの先生を別にして、ぼくをいちばん可愛がってくれたのは、そのオーケストラのコンサートマスターをやっていた人です。ガリガリニやせて無口、一見、冷たそうに見えてその実、誠実で真剣味のある、格好だけはパガニーニそっくりの、やさしい青年でした」

「-----」

「しかし、その人の〈パガニーニ風〉は、全くの見かけ倒しで、信じられないほど音程が悪く、指もまったくまわらないので、ぼくは内心馬鹿にして軽蔑していたんですけど、いまになって考えると、ほんとに音のきれいな人で」

「そう、あれこそが、本当の音楽を楽しむ姿なんだ。ぼくもあの人に、ずいぶん可愛がってもらった記憶がある。オーケストラのパート譜なんかもよく写譜していたねえ。独特の細かい書体、いまでも眼に浮かぶなあ」

男はもう不思議がる様子もなく、つつい圭ちゃんの思い出話に引きこまれたようだった。

「やさしい人だった。時々キャンデーなんか買ってもらったりしてね-----。いまあの人、どうしてるんだろう」

「肺病で死んだらしいです」

「-----」

「いい人って、早く死んじゃうんですね」

「もう一人おもしろいひとがいたねえ。たしかホルン吹きだったと思うんだが、一日にコーヒーを五回以上飲まない、調子がおかしくなるって言ってたあのひとはどうしたろう」

「えっ、そんなひといましたっけ」

圭ちゃんは一瞬現実をめざめたのか、たちあがって女の方へ行き、新しい水をもってきた。

男はしばらく無言で空グラスをなでまわしていたが、やがて記憶をふっきるかのように、ビールをつぎ、一気に飲みほした。

一息入れた圭ちゃんの話は続く。

「当時のぼくって言えば、音楽にはからっきし無神経で、指が早くまわるのと、大きな音を出すのだけをただただ得意にするだけで、汚い音でガリガリ奏きまくっているだけでしたが、その人や先生たちが苦笑しながら、〈そこはピアノなんだから、もう少し弱くてもいいんだよ〉なんて言われても、一生懸命奏していることに水を差されたような気分になるといった、まったくの子供だったんです」

「うーん-----。まあ、子供ってそんなもんだよ。それにしてもあの練習はひどかったなあ」



「先生、おぼえてます？ あそこにあった、あの大きな壁時計」

「うん、たぶん戦前からつるしてあったやつだろう」

「あれをね、あのローマ数字を、反復練習が始まるたびにながめたものです。なんだ、まだこんな時間か、早くうちに帰りたいなあ、あーあ……なんて、何度もアクビをしたもんです。我慢しながらアクビをすると、涙でローマ数字がにじんで見えたものでした」

男の視線は、部屋のアンティーク時計の間をうつろにさまよった。たったひとつ動いている一番大きな時計の文字盤は、やはりローマ数字だった。

「そんなにいやだったんなら、すぐやめればいのに」

「ええ。でも、練習は耐え難くて、いやでいやでたまらなかったけど、それを別にすれば、あそこに行くということは嫌いじゃなかったんです。貧乏臭くて小汚い日常生活からの解放、憧れ、逃避……。学校友達の、プロレスや野球くらいしか話のないような連中には、とうてい感ずることのできない体験を得られる、という一種の優越感……。

ですからぼくは、練習の一時間前には、必ず着くようにしていたもんです」

「フーン」

男は、同意するように深くうなずいた。

「誰もいない、お化けもいやがるほどさびれ切った仏教会館……。実に不気味でこわかったんですが、一方、格好の遊び場でもあったんです。傷だらけの建物の、なお一層うらぶれたほこりっぽい個室のなかに放置された、使い古しの壊れた電話器……。電話なんて当時、金持ちとしての絶対的な象徴だったんですが、いとも無造作にほったらかしてある、あの違和感……。

その会館は、戦前に建てられた相当に古いもので、とてつもなく高い、とぼくが感じた白亜の天井は、煤やシミで不気味な模様を描いていて、少しでも声を出したりすると、反響してくるこだまは、まるでその不気味な模様のお化けが答えているような気がして、ひとりっ切りでいるときは、とてつもなくこわかったもんです」

(続く)



## 今後のスケジュール

### 【癒しの純正律音楽コンサート】

2016年11月23日水曜日(祝日)16時開演

会場：大阪市旭区民センター(小ホール)

出演：水野佐知香(Vn.)、三宅美子(Hp.)、吉原佐知子(箏)

入場料：前売り3,000円(当日券3,500円) 学生2,000円

### 【クリスマスコンサート】

2016年12月25日日曜日14時開演

会場：新宿区牛込笹塚区民ホール

出演：水野佐知香(Vn.)、三宅美子(Hp.)、吉原佐知子(箏)

入場料：前売り3,000円(当日券3,500円) 学生2,000円



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東3-2-5-102 NPO法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

<http://just-int.com/>

平成28年11月10日 発行責任者：NPO法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫